

まんだら通信

第139号 (通巻171号)

平成20年(2008)1月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>
E-mail ryusho@awa.or.jp

永代供養墓

密厳塔

昨年、総代会の時に皆様にお諮りして、賛成して戴いてから、折りに触れお知らせしていた永代供養墓「密厳塔」が、請け負って戴いた毛利石材店さん、関連の業者さんの、念には念を入れた丁寧なお仕事で、去る十二月二十日に無事に出来上がりました。

台座部分は高さ三〇センチ、広さ三九五センチ四方。
納骨室の本体は高さ一五〇センチ、床面積一九〇センチ四方の、ゆつたりとした大きさです。

工費は三百万円で、既に木曾志郎會計さんが支払い済みですが、安置した聖観音菩薩は毛利石材店さんの奉納です。

この工事代は、お寺のことだからと、随分勉強して下さったのではないかと思います。

観音さまは、いうまでもなく広大無

辺の慈悲の仏さまですが、納骨された御霊の安らかな眠りを見守って欲しいということだけでなく、お参りの人々の幸せも是非お願いします、との希望も込められています。

この観音さまに掌を合せることは、納骨の御霊の冥福を祈ることですし、御霊の冥福を祈ることは、観音さまを祈ることであります。

お寺にお参りの時は、どうぞこの密厳塔まで足を運んで戴きたいと思えます。『密厳』は、真言宗で考えるみ仏の世界、つまり浄土のことですね。

題字は、館山の石勝石材店の奥様に特にお願ひしました。

現在はパソコンでも楷書、行書、隸書、篆書その他、あらゆる書体の字を書けますが、能筆の人と較べたら味わいという点で、これはもうお話になりません。

私は正月早々、柄にもなく多忙な日が続いていますが、一段落したらお

開眼をして、お預かりしている分をこちらにお納めしたいと思っております。

昨年、淋しいことですが、跡継ぎに恵まれない方や、その他色々の事情で、行く末を案じている方もおられます。

ご存知の通り、お寺は生きて行く上で突き当たる色々の不安や悩みを解きほぐすお手伝いをするところ。

この『密厳塔』もその一つに過ぎません。

また「ご先祖代々のお墓は白浜だけれど、他所に住むようになって久しくなると、掃除やお参りも疎遠になつて・・・」というお話も聞きます。

出来る間は、ご自身でお勤めになるのが良いのはいうまでもないのですが、不自由になつてきたらお寺にご連絡下さい。お身内のように行かないかも知れませんが、お寺では既にお手伝いしています。

もう一つ。

人は誰でも、遅かれ早かれご先祖や仏さまの国に帰ることになります。

分かりきったこととは言いながら、日々の忙しさなどに事寄せて、一番大事なこのことを先送りし勝ちですが、まさかの時には遅過ぎるのですから、自分の眼の黒いうちに、万一の時のことを考えておくべきでしょうね。去年は、東京を始めとして、関東地方に前後四回ほどお葬式に行きました。

駕籠に乗って草鞋履きという時代と違って、高速道路と自動車のナビゲータで、知らない土地でも迷うことなく行くことが出来ます。こんなことに限らず、どんなことでも聞かせ下さいますよう。遠慮は無用です。そのためにお寺はあるのですから。

◆新年おめでとうございます。今年も『まんだら通信』を宜しく願ひ致します。

里帰りの皆さんはゆったりできたでしょうか。

3日から4日にかけて横浜に行きました。館山道の上り車線は、お土産満載の車が沢山走っていました。

◆暮れから元旦にかけて、久しぶりの“大西”が吹き荒れました。乾いた強風は憂鬱なものですが、“大西は海の肥やし”とか。ものは考えようですね。◆スリランカのコロンボ近くに、『あそか基金』の管理をして下さっているアンギラサ師のお寺があります。

今、本堂の建て替え中で、今年11月に落慶の運びだそうです。

その時には、是非お祝いに行きたいと思っています。

日程は11月というだけで、他には何も決まっていますが、折角なので古都キャンディや、出来ればバドゥラの僻地のアジト君のお宅の訪問もしたいし、一部の区間だけでも汽車に乗りたいたいなどと考えています。

インドと違い、北海道に近い面積の国なので、目的地までの移動の時間が短いことがいいですね。

そして何より、住んでいる人たちが穏やかな気風で、他の国で旅をするように身構える必要がないこと。宮沢書店に、最新のガイドブックを頼みました。

◆タイトゴメ【べんけいそう科べんけいそう属】。『原色牧野植物大図鑑』には、「高知県柏島の方言。大唐米。葉の形が米に似ているからか。」とあります。写真はほぼ実物大ですが、葉は肉厚で多肉植物のようで、一個の葉は2~3ミリ。とても米粒のイメージではありません。

波しぶきがかかるような岩場の、他の植物が目もくれないところで、僅かなひび割れを糧にしがみついて暮らす姿が、何とも言えず健気に思えてついカメラを向けます。現在の草丈は精々8ミリ。来る春に備えて必至に耐えている、そんな様子が手に取るように思える雰囲気です。

2008.01.06 龍渉



余滴



今日より明日が・

『MOKU』という月刊誌があります。

B5版150ページ足らずの月刊誌で、「日本人よ、誇りを取り戻そうではないか。」という趣旨で、お金儲けや旨いものとか、ファッションなどとは無縁の内容ですから、多分余り売れないだろうなと思うのですが、それでも出版しようという心意気が気に入って、もう何年も定期購読しています。

今月号はご覧のように、いかにも元気が出そうな特集で、外交評論家の加瀬英明さんと、サンマリノ共和国特命全権大使マンリオ・カデロさんの対談があります。

印象的なお話を抜き出すと

「今、自分の宗教こそ正しい、だからお前は間違っている・・・、という一神教の考え方は行き詰まっています。

日本人は、海にも川にも太陽にも老木にも道ばたの草にも神が宿っている

といえます。

八百万の神ですね。全宇宙を神そのものとして畏みます。これは、今やりのエコロジーと同じ考え方です。

五五二年に仏教が日本に入ってきて、神道と一つになります。これが神仏習合とか神仏混淆といわれるのですが、このように土着の宗教と外来の宗教が、平和的に一緒になったというのは日本だけです。明治維新のときも同じで、キリスト教圏以外の国で近代化に成功したのは日本だけです。

日本は、外国文化の完全な支配下に置かれたことがない。いつも混淆とか習合という寛容さで外来文化を吸収し、一方で純粋な文化を守り続けてきたのです。

そして、宗教でも自動車でも何でもそうですが、海外の文化や技術、産業が入ってくると日本的な展開をして、もののもの以上の発展をしてしまうのです。それが日本のしなやかさであり、強かさであり、総てを取り込んで更に成長させるという、日本の文化の本質なんです。

いわれてみればその通りですね。

これは昨日今日に始まったことではなく、一五四三年に種子島で二丁手に入れたポルトガル伝来の火縄銃が、すぐに根来衆などの手で作られ、次の年には堺の商人によって武器として出回っているのを見て、昔から日本人の技術が勝れていたことが分かります。

同じ号の別のページで、京都大学大学院教授、佐伯啓思さんは次のようにいいます。

「伝統に基づく精神的価値こそ、戦

後の日本で最もないがしろにされてきたものである。

日本の伝統的精神の核心には、無私や誠や清明心という観念がある。私的利益の追求よりは共に生きる他者への配慮を優先し、無限に富を生み出し、豪華に飾り立てるよりも、必要なのだけを大事にし、欲望を全開にして解放するよりも、それを抑えて自己を抑制し、権勢を誇るものよりもはかなしいものへ愛着を持つ。こういう精神が日本には伝統的に存在する。

・・・いうまでもなく、戦後日本が追求してきた経済成長至上主義や、近年の日本を覆っている改革万能論などは、全くこの精神に反するものである。金銭が金銭を生み出す金融市場での投機的利益をそのまま肯定し、ビルの高さをますます高くするというのは、人間の欲望と利益実現の無限拡大を信奉するアメリカの発想である。

その意味では、戦後日本は精神的には未だにアメリカの占領下に置かれているといってもよからう。これらの価値観が、日本の中に堆積された精神的価値観と大きく異なることを我々は自覚すべきである。

戦後ずっと続く、アメリカによる《精神的な占領状態》から解放されなければならぬ。」と。

その、《精神的な占領状態》から解放されるための格好の書物がここにあります。抄訳版『アメリカの鏡・日本』（著者ヘレン・ミアーズ 角川書店 781円）です。

思い込みや想像や伝聞ではなく、膨大な公的資料と、当時の米英のマスメディアの記事という第一次資料を渉猟

して淡々と書き上げたこの文庫本は、戦後の私たちが教えられてきた大東亜戦争までの日本の姿、「悪いのは日本だった。一部の指導者が間違った戦争を起こした。アメリカが日本を解放し自由を齎した。」が、本当は全く逆の事実だったことが、手に取るようにはつきりと分かります。

難しい本ではないのですが、読み通すには正直に言って少々根気が要るでしょう。けれども日本人の誇りと本当の意味での心の自由を取り戻す絶好の教科書であることは間違いありません。